

ブラウニング研究者 曾根保の自伝

向山義彦

曾根保氏(1896-1976)はブラウニング研究によって最初の岡倉賞(1932)を受けて以来日本に於けるブラウニング研究の進運に多大な貢献をはたして来られたのであるが、戦後間もなく脊髄(頸椎)を傷め、そのため1952年お茶の水女子大学英文科主任教授を退官し、再起不能のまま25年間病臥を強いられたのである。

「英語と英文学」に連載(1967-8)された氏の“あのころのこと”に“Browning 夫妻の初版本を全部取り揃えるには・・・その一冊一冊についての思い出も数知れぬものがある。うすれがちな記憶の糸をたどりながら、青年の頃の熱情と苦心談を病臥二十年の記念出版として自らを慰めるよすがとしたい”(Part 7)と述懐し、次でその記念出版の準備として“・・・目下「ある英語教師の記録」を口授している”(Part 14)と言って居られる。この記録は遂に実現されないまま氏は長逝された。然し、氏の没後6年、1982年子息曾根翼氏を口述発行者として「ある英語教師の記録」は発刊された。このたびここに発表されることになった「ブラウニングと私」はこの記録とは別に氏が小自伝として1973年に書いて、同年5月15日当時 Baylor 大学に在学中の私に送って下さったものである。それは下記に記すようないきさつによるものである。

Baylor 大学(Waco, Texas)の Armstrong Browning Library にある Japanese Collection は昭和初年より故市河三喜博士の尽力によってできたものであるが文献の収集発送に当たっては当時助手であった曾根氏が博士に助力を添えていることは「英語青年」108巻1号の記事で博士が認めて居られる通りである。1958年私は Baylor に行つてこの Japanese Collec-

tionに収められている“Paulineに就いて”(「英語研究」, 1926)と言う卓越した論文を読み、それが当時まだ東大の学生であった曾根保氏によって書かれたものであると知ったのが同氏の研究業績と私の出会いであった。その後市河博士の学位論文 *On the Language of the Poetry of Robert Browning* が震災で焼失したことを知り曾根氏ならその内容を知って居られるかと思ひ手紙を出したのが氏との交信の始まりであった。その後私は Baylor で *Browning Study in Japan* と言う論文を書くことになり曾根氏が Browning study を始めた動機等について照会の手紙を出した所返事に代えてこの「ブラウニングと私」を送って下さったのである。Armstrong Browning Library について特に関心を以て語っておられるのはそのような事情の下に書かれたからである。記述の仕方にやや不明確な点が見られるのは口授したものが代筆されたからである。誤字等も所々に見られるが原文をそのまま発刊することにした。ただ Blunden に言及した箇所では引用が脱落しているので例外としてこれだけは補填し、その旨註記することにした。前記市河博士のブラウニング論文はその内容について博士自身何も書き残しておられないし、研究者の批判も論究もないので全然知る由がなかったのであるがたとえ一言だけの短いものであってもこの自伝の中の曾根氏の論及はその片鱗を伝えるものとして意義あるものと思われる。

上田敏、厨川白村等による aesthetic-humanistic なブラウニング研究は Hearn の影響によるものと見られるが曾根氏の場合はどうであろうか。ブラウニング紹介者としての白村が“外人教師” Hearn からその影響を受けたように曾根氏も“外人教師” Blunden に負う所があったのではないだろうか。1930年代に出版された「研究社英米文学評伝叢書」の中の「ブラウニング夫妻」は曾根氏の執筆になるものであるがその中で氏は学生時代菊富士ホテルでブランデンから *Pauline* を習ったと言ひ (p.27), ブランデン自身も後年このことを“our own little Browning Society”と呼んでなつかしように回顧している (Chaucer to “B. V.,” p.208)。このように東大在学中にブランデンから *Pauline* を学び、在学中の1926年に前記「Pauline 論」を最初の published work として「英語研究」に発表し、次いで二度目

の published work として翌1927年東大を卒業した年に同じ「英語研究」に『詩人ブランデンの生い立ち』を寄稿している。最初の公刊発表がブラウニングであり、二度目がブランデンであることがブラウニング研究者としての曾根氏の『生い立ち』を如実に示している好個の monument と言えないだろうか。その後長い病床にあって『日本英文学1930年代の花ざかり』を回想するかのよう¹に *Today's Japan* (1957) に “Edmund Blunden, Teacher” を寄稿し彼のブラウニング研究の師としてのブランデンについて詳しく書いている。次いで「英語研究」(1963)に『Blunden Number の思い出』を寄せ、「英語文学世界」(1966)には『ブランデン先生の講義』を誇らかに紹介している。曾根氏がブラウニングについて論ずる時には必ずブランデンの名前も出てくる。ブラウニングもブランデンも共に『ブラ』で始まるので読み違える程両者の名前が重なって出てくるのか曾根氏の記事の特色である。白村が『恩師小泉先生』と呼ぶ気持以上に曾根氏はブランデン先生を恩師と感じていたのではないだろうか。

曾根氏は白村の恋愛至上主義的なブラウニング紹介を嫌い、そのため京大に行くのを止めて東大に行くことにしたとこの自伝の中で説明しているがこれは白村等 Hearn 学派によるブラウニング紹介の意図が正しく理解されず、誤って解釈されるに至った伝統的な謬見の一例を示しているものとして興味あるところである(この論点については拙著 *Browning Study in Japan*, 東京:前野書店, 1977. 参照)。この謬見は故石田憲次博士が大正十年「読売新聞」で白村の恋愛至上主義的ブラウニング観を論駁したのに端を発するのであるが、曾根氏が『恋愛は人生にとって最大の重要事ではない』とこの自伝の中で白村を批判しているのも石田博士がその昔白村を駁した論旨の引写しであるように見えるのが大へん興味ある点である。

曾根氏はこの「ブラウニングと私」の中では、氏とブラウニングの最初の出会いについては言及していないが前記の「あのこと」(part 9)で氏がブラウニングを愛好するにいたったきっかけを作ってくれたのは関西学院へ入学した時歓迎会の席上池田多助先生の“The Boy and the Angel”の翻訳を聞いた時に端を発したのであると語っておられる。

最後に一言つけ加えると、曾根氏は1927年東大卒業に際して書いた *Sordello* 研究の卒論を私に送って下さった。この卒論の要旨は *Sordello* の発想と執筆は *Paracelsus* に先立つもので *Pauline* と時を同じくするものであるとしてその論拠を *Sordello* の作品そのものの中に立証したものである。これは当時の研究としては世界の学界に先がけたものであると認められるのでこの功績を広く英米の学界にも紹介する価値あるものと思い *Baylor Browning Interests* #25 (1980) として公刊したのである。「英語青年」126巻, 7号, 片々録, 参照)。唯, 残念なことはこの卒論の出版も, 又この自伝の公刊も曾根氏の生前に実現できなかったことである。

上記 *Baylor Browning Interests* #25は残部があり, 希望者には実費(400円)でお頒ちできるので私宛に申し込まれたい。



...and he [Blunden] has never come to Tokyo without inquiring after my health, coming always with flowers, pictures and books.

(T. Sone, "Edmund blunden, Teacher," *Today's Japan*, 1957.)

「ブラウニングと私」

曾根 保

関西学院英文科には優れた教授がいられたのは私にとって幸せであった。佐藤清先生はポエトリーを担任していられたので、英国詩人の優れた詩をアンソロジーによって教えられた。三年の夏休みに毎日、先生の翻訳の御手伝いをさせてもらった。元来、先生は福音書店の求めに応じて『宗教と文芸』叢書を書かれていたが、その一部としてA.H.STRONG著のテニスン、シェイクスピア、ミルトン、ワーズワース、ブラウニング等の原稿の清書の御手伝をした折、ブラウニングの事を小伝的に知ることが出来た。その前にアメリカから図書館へ寄贈してきた本の中にブルックの「テニスンとブラウニング」と言うのがあって、当時、図書館の司書をしてい

た兄の勧めで、同書を大阪の丸善に注文した。ブラウニングでは文章も覚えていた位だったので、後年、学習院教授三浦太郎氏のブラウニングが英語の雑誌に載っているのを見た時、それがブルックの手引きの写しで盗作である事を知って、学習院のような優れた学校にもこんな卑劣な人がいるかと軽蔑の念に燃えた。その頃、京都大学英文学科主任厨川白村氏がブラウニングの詩、例えば『廃墟の恋』が連載されていたのは興味を感じた。私は、京大から週一回支那哲学史を教えに来られた浦川源吾先生に京大に入学出来る成績だから推薦したいとの御言葉を受けた。厨川白村氏は雑誌や新聞にブラウニングの記事を寄せていられたのには敬意を表していたが、『近代の恋愛観』と言う一冊の本を出された時、あまり学者的でない論説に接し、また、厨川氏の下に勤めていられた石田憲二 (sic) 教授の厨川白村氏の論説に対する批判を読んだ時、京大に入学する事を断念して、語学者としての市河三喜先生の『英文法研究』等に接して英文学を修めるには英語学の基礎を第一条件と信じて東大に入学する事を決心した。入学後知った事であるが、先生の博士論文は『ブラウニングの詩について』であったので市河先生からブラウニングについて御指導を受ける事が出来ると喜んだが、先生は私のブラウニング熱に水をかけるような態度で、例えば、*NED* に載っているブラウニングの詩句を集めてみたらと相談すると、

「そんな事は誰かがやっているだろう。」

とか、ブラウニングの詩に現れる色彩の研究はどうでしょうと聞くと、

「そんなものはとうの昔に本になっているよ。」

と言って、書齋から一冊を取り出し貸していただいた。また、私は幸運にも先生の御宅に自由に出入りを許されていたので或時、先生の博士論文の草稿でも見せていただきたいと言ったら、

「論文はケア教授の審査に合格して、称号を授与されたけれど、論文は図書館にあったので大正十二年の関東大震災で焼けてしまった。草稿の一部をなすカードはあの辺にあるだろう。」

と言われたので、先生の不在を狙って引出から紐で繋がれたカードを取り出してみた。ブラウニングの詩に現れる連語を集め、分類されたものに

過ぎなかった。私の眼に触れた一句は *in fine* であったが、先生独特の方式で分類されたものらしかった。

或午後、市河先生から、BAYLOR 大学の ARMSTRONG 博士が例の世界漫遊の途次、東京に立ち寄られた東大構内の同博士の知人の記念碑を見たいと言って御案内した。君の事を話したら、是非会いたいとの事だからこれからでも帝国ホテルへ行ってみ給えとのことだった。私には全く未知な人だったが優しい小父さんのような感じがした。

「丁度前大統領ウィルソンの未亡人にお茶の招待を受けているから、一緒に来給え。」

と言って未亡人に紹介された。この一刻は私にとって大いなる光栄であった事は勿論である。その後、市河先生の指示で日本におけるブラウニング文献を出来るだけ多く BAYLOR 大学に送る事になった。従って、グリフィン、ミンチン共著『ロバートブラウニング』の翻訳を勧められたのも Armstrong 博士であった。勿論、ミンチン氏からも私の翻訳を歓迎する旨の御手紙をいただいた。発行所 METHNEN からも同意を得た。私の翻訳が出版されてから後に METHNEN から英国大使館に翻訳の件につき問い合わせがあったので、商務官サンソム氏から私に、

「どうして本屋へ本を送らなかったか。」

と問い合わせを受けたが、サムソム氏の御好意により〃 (*sic*) 私版として発行した旨を伝えていただき、別に問題にはならなかった。当時、売価七円、予約者五円だったが、BAYLOR 大学からは五部注文を受けた。多分一部十ドル(日本金二十円)、今は稀講 (*sic*) 本の一つとなり昨年は一冊三万円だと言う話を聞いた。

関西学院ではどこの大学にもあるように、一年に一度は英語劇が催された。オズリン作の『銀三十』と言う題でユダがキリストをローマ兵に売る場面だが、英語がよく、参加学生の熱心さもあって好評を博した。私は詩のレシテーションを充て行われて劇には加わらなかった。レシテーションや GLEE CLUB の演奏は毎年催し物としては人気を集めた。ところが当夜、私は高熱を発して参加出来なくなった。折角長い間練習した THE

STATUE AND THE BUST を披露する事が出来なかったのは残念だったが、翌日の新聞では、番組の中で曾根保君の暗誦が白眉だったと出ていたのには少なからず驚いた。その後、レシテーションを求められる時はこの詩と RABBI BEN EZRA をすることにした。読めば読む程ブラウニングの詩は私の気持に合うような気がしたので、卒業論文はブラウニング詩集の『恋の成功，不成功について』であった。これは審査員の佐藤清教授の御宅に保存されていて、佐藤先生没後、奥さんから、

「貴方の論文を売ってあげてもいいですよ。」

と冗談を言われた事があった。先生の蔵書は全部、関西学院に譲渡されたので、その論文が今何処にあるか不明である。二、三ヶ月前、私の初めての翻訳『琥珀の国』（大正十年発行）が関学図書館に保存されているのが解かり、友人に図書館まで出向き写真を撮ってもらい、そのはしがきをゼロックスにしてもらったが、この一冊を個人で持っている人は未だに見当たらない。

オゾリン教授はラトビアのリガ出身だが、赤色ロシアを嫌ってアメリカに渡り、東部から西部へバイオリンを抱えて流しなどし、汽車のただ乗りの常習犯ともなって南カリフォルニアに辿り着き、南加大学の美術科に入学し、卒業と同時に関学に来られた人で、十六ヶ国語の言葉が話せるという語学の天才だった。私は招かれて舞子公園万世園の御宅で同居する事になった。舞子駅から西灘駅までの定期乗車券を買ってもらったばかりでなく、行き届いた御世話で通学が出来た。汽車の中は四、五十分で乗客も少なかったから、ロシア語を教えてあげようと言われたが、私は大学へ行けば第二外国語として独仏語をとるのが普通だから、独語を教えてもらう事を頼んだ。舞子公園の家は目の下に松原を見下ろし、明石海峡を越えて淡路島の灯台を眺め、景色としては須磨や明石とは較べ物にならぬ程美しいので独り部屋に座っていても、空行く雲、青い海を頻繁に行き交う外国汽船、裏山の鳥の声、眼が覚めてから日暮れまで詩情を誘うものばかりだった。夜は下の東海道線の列車の音がたまに聞こえるぐらいだから、ブラウニングの詩を読んだり、近所に住む神戸女学院学生の女の子と仲良しに

なったり、青春が一杯と言うのはこんな事だったろうと思う。オズリン教授のブラウニングの詩の講義も当時の私の心にぴったり合致するようで面白かった。今、関学正門前で買ったブラウニング詩集 POEMS BY ROBERT BROWNING INCLUDING "DRAMATIC ROMANCES & LYRICS," "PAULINE," "SORDELLO," "MEN AND WOMEN," ETC. LONDON: GEORGE ROUTLEDGE & SONS, LIMITED. BROADWAY, LUDGATE HILL, FC. MDCCCCL を開けてみると習った詩には書き入れまであって懐かしい。ウズワース教授のブラウニング演習も私には新しい分野が開けて講義を楽しみにしていた。京大の厨川博士の恋愛至上主義を振り回されるのには些か反感を持った。何故なら恋愛は私にとって至上のものとは言えないからである。恋愛以外に優れた価値のあるものは無いと思うかも知れないが、それは人生のほんの一部の間の事で、男が命をかけてやる事には或人にとっては一種の調味料にもなり、また、或人にとっては身を滅ぼすものになるかもしれないから、私は白村氏の説には同意しかねたのである。

ブラウニングの詩について本を書いている斉藤勇先生はまだ助教授で在外研究員として英国に行かれ、授業はその翌年からであった。先生は現代英国詩人の作品を教えられたが、私は時々詩語の解説に不満を感じた事がある。先生の卒論はテニスだったそうだが、矢張りブラウニングはテニスとは異質のものである事が愈々はっきりした。沢村寅二郎先生の THE RING AND THE BOOK は第一巻だけの演習だったが、出席学生は四、五人にすぎなかった。だから私は毎時間読んで訳さなければならなかった。先生の訳し方には一目も二目も置いた。中に難解の詩行があってブランデン先生にも御伺いしたが、はっきりしなかった。昭和五年、大英博物館のビニョン氏が国賓として来られた時、選ばれて通訳その他御世話を大学から命ぜられた。なにしろ有名な良い英語を話されると言う人だけあって二ヶ月間私は毎日先生の純粹の英語を学ぶ事が出来た。或朝、宿舎の独逸大使館から英国大使館に行かれる途中、

「何か聞きたい事は無いか。」

と言われたので、私は先に掲げた難解の詩行をポケットから詩集を出し、先生に示したところ、詩集を手にして立ち止まり一寸考えていられたが、

「これは bad English だ。」

と言って説明して下さいました。この詩行は後日文理科大学の石川林四郎教授を御訪ねした時、

「この所が僕にもはっきり解らないのだが、教えてくれないか。」

と言われたのでビニョン先生の説明を言ったら納得された。ビニョン先生は

「我々にも難解な所のある詩人をどうして研究するのか。」

と聞かれた時、私は、

「それでもシェイクスピア程ではないでしょう。第一ブラウニングの詩が兎に角好きなんです。」

と言ったら頷いておられた。

毎年開催される軽井沢夏季大学で石川教授がブラウニングの講義をされる項目があったので出席を申し込んだ。授業の始まる前に市河先生と並び称せられる文法学者細江逸記氏に声を掛けられた事は嬉しかった。細江氏の英文法汎論をよく読んだ関係もあって、その独自の文法論には多くの人が称賛を惜しまなかつただけに、

「あなたがブラウニングの曾根さんですね。」

と言われて私は返す言葉もなかった。石川教授の講義が始まった。風呂敷に十数冊の本を包んで教壇に上られた教授は開口一番、

「ブラウニングの曾根さんから教えてもらうつもりですが、私は研究に参考になると思ってこのような本を持ってきましたから御自由にご覧ください。」

私は来なければよかったと思う程恥ずかしかったけれども、内心これは大変だぞ、ぼやぼやしてはいられないぞという気持ちが湧き上った。国際連盟の日本代表としてスイスに行かれ、後に日米関係をよくする為全米に講演旅行に出られた新渡戸稲造先生の御宅をホジソンの御伴で訪れた時、先生は私に、

「あなたは御専攻は何ですか。」

と言われたので、

「ロバート・ブラウニングです。」

と答えると、

「ああ、それは大変ですね。後進の研究家の為に骨折っていただきたい。誰かが開拓するように道があるのですから、是非骨折して下さい。」

と肩を叩かれた時、また、私はどうしても登らなければならない高い山を眼の前に見た。幸に、兵庫御影の報徳銀行社長大江市松氏から研究費を充分にいただいているので、出来るだけ研究資料を蒐集する事に決心した。市河先生は英米の古本屋をよく利用されているので、先生は目録にブラウニングとあると必ずチェックして私の机にぽんと投げて下さった。資料の蒐集は私自身の為もあるが、日本にもブラウニング愛好者があるから多少でもお役に立てたいというのが本心だった。初版本を見て詩を味わうのと、選集を読んで味わうのとでは、本人に会うのと代理の人に会うのと程の違いがあるので、初版、再版、三版を比較研究する所謂 TEXTUAL STUDY の為にもブラウニングと名前のつく本には hunter が獲物を狙うような鋭い眼が養われるようになった。また、古本屋に頼んで探してもらったものもある。例えば、偽手紙で問題になった Shelly (*sic*) の書簡集などは運よく二冊も入手出来て一冊は斉藤先生にお譲りした。私の本の扉にはテニス夫人宛の言葉書きがあり、金髪が一本輪になって挟まっていた。T.J. WISE 氏の裁判沙汰にさえなった偽版も手に入り、市河先生に褒められた事は『あこのころのこと』に触れておいた。

同級生の酒井義孝、北村常夫と計り、正則英語学校で夏期英文学講座を開いた。多くの講義者に依頼したところ、快諾して下さいって一週間成功裡に終わった。翻訳文学などで造詣の深い柳田泉氏、新聞界の長老千葉亀雄氏、英詩をかかれる岡田哲蔵氏、言語学の市河三喜先生等有名人が顔を揃えていたので満足だったが、我々若い者も自分のもので時間を埋める事にしていた。私は THE RING AND THE BOOK の中の POMPILIA 一巻をプリントにして講義を引き受けた。その頃までに私は第五巻までこつこつ

と翻訳を続けていたが、その頃、後に THE RING AND THE BOOK の翻訳を公けにされた我々の先輩、小田切米作氏から二人で全訳を試みようではないかと言う御申し出で (sic) があった。はっきり月日は覚えていないが成城町の市河先生の別荘で英文学界の第一人者、土居光知先生 (当時東北大学英文科主任教授) から研究社英文 (sic) 叢書の中に THE RING AND THE BOOK を入れたらどうかとの御勧めがあったが、私は未熟でまだまだ研究が足りませんから、出来るようになったらお願いしますと言ったが、今考えてみると、大変な事業ではあるが、外の事を捨てておいても、また、不完全でも引き受ければよかったと思う。戦後 (sic)、研究社社長酒井五一郎と話している時、ブラウニングの詩集を出したらの勧めがあったので、私の好きな詩だけを集めて注解を書き上げた。その間にテキストは校了一步手前まで進んだのだが、戦争が激しくなってテキストの印刷は中断された。最近研究社に問合わせたとこ、紙型も何も残っていないとの事で、私の手許には notes だけが惨めな姿を残している。

小田切先生は病床の私を見舞って下さったが、遂に独立で十二巻だけは翻訳を完成された。私はこの時は小田切氏に資料を提供する事が出来たが、以前の私は市河、土居、斎藤、石田、竹友、佐藤諸先生から、

「君の蔵書の中に無いものもあれば差し上げる。」

と言って下さったので、その御好意に甘えて数冊の本をいただいたが、いずれも珍しいものばかりで、入手困難なものを惜し気もなく私の蔵書に加えて下さった寛大な御気持ちを思うと私は今でも最敬礼をしたい。プランデン先生は古本漁りが有名だが、或日、西崎一郎君の案内で神田の古本屋を軒並み漁り、ブラウニング・コンコーダンスの底本になった詩集を探して来られ、私に見せて下さった。私が、

「この詩集を数年探しているが英米では見つかりません。」

と言うと、即座に、私へ与える言葉を書き入れて持って帰れと言われたが、本の値段がいくらであるにしろ、自分の為にお探しになった本を一日も手許に置かず私に下さった事を思うと、私も友人にこのような親切を試みたいものだと思う。

恐らく岩波書店の『思想』に対抗するつもりで私の御世話になっていた大江氏の長男精一氏が理想社を起し、季刊誌『理想』を出版されていたが、度々御会いしている内に『理想』に何か執筆するやうにとの事で、『ロバート・ブラウニングの散文』を連載した。また、小説家、森田草平（法政大学教授、夏目漱石門下の一人）が『英語英文学講座』を出版されるに当たり、私にブラウニングの THE RING AND THE BOOK を紹介（sic）するやうにという事で書いたのが『指輪と本』である。また、市河先生を通じ岩波書店主茂雄氏から、或人の書いたブラウニングの原稿を審査するやうにとの依頼があったが、私のような駆け出しでさえも不味い所のあるのが幾つもあったので、御本人には御気の毒だったが出版には不適當と返事をした。岩波氏から丁寧な御手紙と同店出版の十冊ばかりを届けてもらった。

関西学院では英語の教師が多数いるばかりでなく、その子供達と接する機会が多く、英語の会話は楽であったので、ブランデン先生がニコルズ氏の後任として東大に来られた始めから、先生とお話しする事が多かった。ニコルズ氏が帰国される時、英文科の先輩の作っていた『ポエチカ』の同人から勧められて記念帳に A BUTTERFLY という英詩を作ってみた。詩になっているか、なっていないかも解らず、ただ、ニコルズ氏に対する別れの言葉として去って行かれる師を惜しんだ詩だが、ブランデン先生に見ていただいた。先生は、

「よく君の気持ち表れているし、詩型は自由だが、アイアムビックのリズムも合っているから。」

と言って殆んど訂正はされなかった。英詩を書く事の難しさはよく解っていた。私達の出していた『英詩研究』で荻原恭平君が英詩を楽々と日本の詩に訳し、また、英詩を創作されるのを見て大変な技術だと羨ましく思った。或時、ブランデン先生が、当時宿泊されていた菊富士ホテルへ招いて下さったので、一晚中英国詩人で先生の知ってられる人の話を聞いて愉快な一晚だった。クリスマス頃にはハーデイやゴス、ブリッジズ、サースンなどのカードや手紙を見せていただいた。

「持っていってもいいよ。」

と言われたが、私は御遠慮申し上げた。

「今、何を読んでいるの。」

と聞かれたらから、私は、

「ブラウニングの MEN AND WOMEN を愛読しています。」

と言ったら、

「自分も読みたいから火曜と木曜の晩に都合をつける。」

との事で、私の蔵書の内、オックスフォード版の MEN AND WOMEN を先生がお使いになるよう持っていった。今日、先生の多くの手紙の中に、今度のブラウニング会は都合で休みにしたいというものあって、時々休みはあったが MEN AND WOMEN を始めから終わりまで読んでいただいた事は有難いことである。所々、先生の英語を書きとる時、ぐずぐずしていると先生が自分である独特の書体で書き入れをして下さった。その手沢本は今も大切に持っている。先生は、

「今度は PAULINE を読もうではないか。」

と言われて、ブラウニングの会を続けて下さったが、あの年令でこのような作品が出来るとは本当の詩人だと言って、PAULINE を好きなブラウニングの詩の中の一つとしてあげられた。Shelly (*sic*) に憧た (*sic*) 青年ブラウニングが躍如として描かれていると思うとブラウニングも只者ではなかったと私は思う。ブランデン先生は多くの大学で講演をされたが、その講義は研究社から出版になってブラウニングの所の終わりには私の事を次のように書いて下さった。

These notes [about Browning] cannot be terminated without a brief tribute to a former student of the lecturer. Many years ago Mr. Sone of the old Tokyo Imperial University used to come to my room where we held our own little Browning Society. Mr. Sone in fact was beginning his studies of the poet which have led to great results. His magnificent Browning library, alas, was doomed to destruction in an air

raid. But he has published works on Browning's biography, poetry and portraiture which abide with us. I commend them to the new generation of readers of English Literature here, for their intrinsic value, and as inspiring models of scholarship, devotion and comprehension. (Edmund Blunden, "Robert Browning," *Chaucer to B.V.*, 研究社, 1967. pp.194-216: 本引用文は本稿筆者による補填)

アームストロング博士にグリフィン・ミンチンのブラウニング伝記を翻訳したらどうかというお勧めがあって著者に紹介された。その時のミンチン氏の手紙が今残っている。相当骨が折れたが、引用されている詩文には翻訳はつけなかった。元来私は詩の翻訳は不賛成で、例えば万葉集の英訳を読んでも、原文を離れる事が甚だしく、翻訳の名手と言われる人もあるが、例えば、上田敏の『ピパの歌』にしる矢張り原文を口誦む方が作者の気持ちを味わうに優れている。唯、若い人や詩を読む事の少ない人の為に原詩の内容を大意として訳しても差し支えがないが、ブラウニングの詩を読む程の人は引用の詩句は原文で読める。また、読めなければならないと私は考える。斉藤先生は訳をつけなければならないと言われるのに敢て我が意を通したのは上の通りである。この伝記は英国作家の伝記として細かい所まで行き届いた伝記であるから、ブラウニングの詩を鑑賞するには不可欠のものである。しかし、内外の文献に親しむ事も研究範囲を拡げる為には役に立つ事を信じて、私自身の編んだ BROWNINGIANA を付け加えたのである。幸いに、岡倉賞委員会の推挙によって第一回の賞を与えられた。詳しい事は知らないが、岡倉先生が還暦になられたので、先生の教えを受けた各地の卒業生が祝賀の意味でお金を寄付した。その金で岡倉由三郎還暦記念論文集が出版され、寄付者に配付されたものである。残金の利子によって四十才以下の英語、英文学、言語学界の青年研究者の作品に対して授与される事が決まって、幸い私が第一回の受賞者になったのである。

私はこの受賞に対して岡倉先生に感謝の意をこめて第二の本を計画し

た。それが『ブラウニングの肖像画』と言う一冊である。私は東大入学以来、佐々木信綱教授の万葉集講義に出席して、柿本人麻呂の肖像画と言う題目に解 (sic) れて色々とお話を聞いた。それで、私のかかなりの蔵書の中から本の口絵となっているブラウニングを小学生の娘、翠に、

「この人の絵がどのくらいあるか座敷に並べてごらん。」

何十冊かの本を並べて、それとこれは同じとか子供は興味を持って分類してくれた。それをグラビアにしてそのまま本にしても本にはなるが、ブラウニングの友人や批評家の感想の記事の中に詩人その人の姿が読みとれるので、それを集めて一冊の本にまとめたのがブラウニングの第二の本である。

研究社の英米文学評伝叢書五十冊の中にブラウニング夫妻の事を書く事になってアームストロング博士にその事を伝えると、あの本の口絵になっているブラウニング親子の写真を送って下さった。原稿を急がされたので、推敲が充分でなかったろうと認めざるを得ない。しかし、私の卒論と同様、欠点が多くても、私の力の及ばなかった印だから諦める外なかるう。

私は日本英文学会創立の時、まだ学生だったが協議事項を記録する為、市河先生に促されて沢村先生と一緒に日本橋裏通りのある料理亭に行った。研究社の社長小酒井氏が待っていた。四人が食事を済ますと、学会の名称、目的、規約、会計等、型通りに話しが進められたが、機関誌『英文学研究』の編集出版には色々な経験をした。多くの会員を有して大会を開く事は大変な仕事であった。無給の副手だけでは処理が出来ないから、伊田君、酒井君、北村君、相良君の諸氏は私を助けて下さった。第一回の大会は東京で、第二回は京都大学に決定した。現在は大学のある所に支部もあり、大会も催されているが、第一、第二、第三回までは仕事が初めての経験だから準備にも骨を折った。日程表を印刷するまでには一ヶ月以上を必要とした。研究発表の数を整えたり、時間割を作ったり、見学場所を選んだり、懇親夕食会を開いたり、大会を開く大学の関係者の骨折りも大変なものだった。京都の大会では石田憲次教授の御勧めで当代哲学者の第一人者西田幾太郎教授に特別講演を依頼した。この偉大な哲学者がブラウ

ニングの詩を訳していただけるのを知っていた私は鎌倉姥谷に避暑中の先生を御訪ねした。これは評伝叢書の終わりにも触れておいたが、暑い夏の半日を尊敬する哲学者から英国作家のお話を伺った事は、忘れられない一事である。先生が、

「私はテニスよりブラウニングの方に心ひかれて愛読しています。ブラウニングの男性的心意気の現れている詩を読むと元気づけられるのです。」

と聞いた時、私もああ、よかったと思った。西田先生の講演は『伝統』と言う題だったが、一時間の内五十分まで御話についていけたが最後の五分間で突離された格恰で、まだまだ私の頭は出来ていないのだと痛感した。その講演を聞いた友人達も同じ意見だったので私はほっと安心した。第三回の日本英文学会で『POMPILIA の性格描写』と言う題で二十分間の研究発表をした。西村稠氏の批評に、流石に曾根君・・・と褒められた記事を読んで私も多くの講演者に肩を並べる事が出来たのを愉快に思った。大会の講演をまとめて英文学研究の別冊として出版する事になったが、頁数の関係から私自身の論文は遠慮しなければならなかった。今度の戦争でブラウニングの初版を除き大部分を焼失したのは神の御意志かも知れないと妙な理屈をつけて諦めた。先年、関西学院の学長が見舞いに来てくれた時、残っているブラウニング文献を全部買い取るという話だったが、学長も先年昇天されたので苦心して疎開した焼け残りのブラウニング文献には心を悩ませている。古本屋に売れば、例え二足三文でも売れるけれども、大江氏の御好意によって蒐集したものが、安住の所を得ないとすると申し訳ないし、アームストロング博士が御存命ならば相談にのって下さる御方だったのにと残念に思っている。博士が市河先生に送られた手紙の中にも私の不具同然の体を心配して勇気づける言葉を送って下さったが、恐らく願いの声も御耳に達する事が出来なくなっただろう。私を戦後三回も招聘して下さって、旅費、住宅費、奨学金も約束して下さり、大学要覧も送っていただいた。日本に来るペイラー大学卒業生は、わざわざ拙宅を探してきてくれ、博士の意向を伝え、

「大学には金がありますから、奨学金も恐らく最高のものが授与されるで

しょう。

是非行って下さい。」

との事だったが、私は既にお茶の水大学校内で転んだのがもとで第六、七頸椎を痛め、手足の自由を失った為に夢に描いたベイラー大学もブラウニング図書館も消えてしまいそうになった。

私は大学院学生になってから研究題目を『英国哲学的詩人ロバート・ブラウニングの研究』とし、市河三喜教授と斉藤勇教授が指導教官に決められた。私は古い文献を漁って、ポーリーンを始め、新聞雑誌も思いの外集ったのでブラウニングの詩の批評の歴史をまとめるつもりで大学院の報告にはそれをあてる事にしていたが、その原稿も昭和二十年五月二十五日のB29による爆撃で家もろとも灰燼に帰してしまった。日本におけるブラウニングの詩についての研究と言う風な文を書いてくれと市河先生に依頼された。書く事は出来たが、それを先生がベイラ (*sic*) 大学を訪問される時、学生に話すつもりだと言われたので、私は済まないとは思ったが、他人の書いたものを自分で発表するという事は師弟の間に時々あるが、幾つかは問題になっているのでお断りした。アメリカからお帰りになって、

「ベイラ (*sic*) では君のお陰で弱ったよ。」

と言われたが、私は私のした事が正しいと信じたから今でも後悔はしていない。しかし、それを根に持って私に対する態度を変えられた幾つかの事件もあった。

先生は折角ブラウニングの研究をしているのだからと言って、毎週水曜日三時から五時までを私にくださって、学生中よく出来る者を十一、二名選び、THE RING AND THE BOOK を私と一緒に読む事にして下さった。沢村先生から習った第一巻ではあるが、ブラウニングの詩に始めて接する学生はよく出来る学生でも骨折ったらしい。語句の解釈までしなければならず私にも骨の折れる仕事であったが、教授でも助教授でもない助手に過ぎない私にこのような仕事をさせて下さった市河先生には御礼の申し上げようもない。研究社の英和辞典編纂の折、仲間の人は優秀な東大卒業生 (法邑清蔵、石井正雄…) であったが、私は学生であるにも拘らずその

中に加えられたが、わたしは自分の勉強の時間がそれだけ無くなるので、市河先生に御断わりしたが、許されなかった。完成までには三年以上かかったが、出来たての辞書を手にした時、その扉に骨折りは損にあらずと書き記した。こういう経験は求めても得られるものでもないし、楽でなく逃げたい仕事であるが、それを敢えて私にさせて下さった市河先生には頭が下がる。

ブラウニングの研究は文献で解るようにクリスチャンの人がその詩に接する機会が多かった為であろう。訳詩や研究もその辺りから発しているように思われる。漱石は我々が英詩を読んでも解る訳が無い。そんな研究は無駄というものだと言って、SORDELLO を読んで始めの一行と最後の一行しか意味が解らなかったと言う逸話をあげているが、カーライルで苦勞をなされた新渡辺 (*sic*) 先生から、

「是非骨折って下さい。」

と言って肩を叩かれたその暖かみは終世消えないだろう。日本の英文学でブラウニング愛好者によって研究されても、それによってブラウニング研究が盛んになったとも言えない。しかし、昨年、ブラウニング協会が発足したと言う話だから今では研究者も何十人かあるのではなからうか。そう言う人達はベイラ (*sic*) 大学にでも行って研究を続けられたら、学会の為にもなると信ずる。ベイラ (*sic*) 大学で学んで帰って来た山本、坂本君などがいるが、続けて根気よく研究しておられるかは定かではない。ベイラ (*sic*) 大学に縁のある私はその様な願いを持っている。私のブラウニング研究は英国詩人の伝記や作品を読むにつれて益々熱を増して、この喜びを多くの学生に分ち与えるのが生き甲斐のある事だと思ったからであらう。唯、中途にして挫折した事は我ながら残念である。